

短編小説「バスローブの女」を巡る論争

1930年代の日系アメリカ文学

山本 岩夫

はじめに

これまで1930年代の日系アメリカ文学について論じられることは少なかった。二世たちが彼らの活発な文学活動によって一世の文学とは異なる独自の文学を發展させたのがこの時代であるが、この彼らの文学活動を対象とする研究はかなり限られたものとなっている。

例えば、エレイン・キム (Elaine Kim) の『アジア系アメリカ文学作品とその社会的枠組』(*Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*) は、二世たちの文芸同人誌『レイメイ』(*Reimei*) に載ったタロー・カタヤマ (Taro Katayama) の短編「ハル」(“Haru”) について長い解説を試み(140 - 143)、トシオ・モリ (Toshio Mori) の作品についても分析しているが(163 - 172)、それ以外の1930年代の作家や作品についての記述はない。

スタン・ヨギ (Stan Yogi) による「日系アメリカ文学」(“Japanese American Literature”) は二世たちに文学作品発表を促したジャーナリストと日系新聞の編集者たちの努力に触れた後、トヨ・スエモト (Toyo Suyemoto)、チエ・モーリ (Chiye Mori)、メアリー・オーヤマ (Mary Oyama)、タロー・カタヤマ、トシオ・モリの作品についてその特徴点を比較しながら述べ、より総合的な1930年代の二世文学論を目差しているが、言及の対象はやはり限定的で、具体的な作品の提示は一編の詩のみである。

ウォン (Sau-ling Cynthia Wong) ・スミダ (Steven H. Sumida) 共編『アジア系アメリカ文学資料案内』(*A Resource Guide to Asian*

American Literature) で取り上げているのは、モリの良く知られている短編「兄弟」(“The Brothers” 1938) だけである。

植木照代他著『日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む』は日系文学のみを取り扱っている点でユニークである。しかし二世文学を取り上げた8編の論文の中で1930年代に書かれた作品を論じたものはない。

このような研究状況を踏まえて設定するこの小論の目的は、1937年に起こったワタル・モリ(Wataru Mori)¹⁾の短編小説「バスローブの女」(“Woman in Bathrobe”)を巡る論争に注目し、その経過と意義を明らかにすることによって当時の日系文学の動きの一端を具体的に示すとともに、歴史の中に埋もれていた一つの優れた作品を提示することである²⁾。

1. 論争の経過

「バスローブの女」を巡る論争の経過を明らかにする前に、1930年代の日系社会と日系文学についてごく簡単に触れておきたい³⁾。太平洋戦争に繋がるこの10年間は日系社会が様々な難しい問題を抱えていた時代であった。その一つが日米関係の緊張である。1931年に満州事変が起こり、日本の大陸侵略の拡大にアメリカは警戒心を強め、1937年に日中戦争が始まると日米間の緊張が高まって、それが1941年の日米開戦へと繋がっていく。このような日米関係の緊張と悪化が日系社会を微妙な難しい立場に立たせた。

また1929年に始まった大恐慌は日系社会にも大きな影響を及ぼし、その主要な産業である農業だけではなく、商業などにおいても経営の厳しさをもたらした。白人社会になかなか受け入れてもらえなかった二世たちの就職もさらに困難となった。

他方、二世たちが成長し、一世との世代間乖離が顕在化しつつあったこともこの時代の特徴である。二世の1935年の平均年齢は15歳といわれているが、アメリカ的教育を受けてきた彼らは、家庭や地域の中で一世

の強い文化的影響を受けながらも、独自の考えを持ち活動しはじめた。年長の二世たちは1929年に全米日系市民協会（Japanese American Citizens League, 略称JACL）を結成している。満州事変に関しては一世と二世との間に意見の相違が見られた。文学活動においても、二世たちは独自の文芸誌を発行した。一世と二世との間の意思疎通の上で、ことばの問題は不利な要因となった。

二世による日系英語文学は1920年代後半に生まれ、1930年代には二世たちの成長とともに、この文学も成長期を迎えた。作品の主要な発表機関はロサンゼルスとサンフランシスコで発行されていた日系新聞の文化・文芸欄であり、全米日系市民協会機関紙『パシフィック・シチズン』（*Pacific Citizen*）であったが、彼ら自身も作品発表の場として、文芸同人誌の『レイメイ』（*Reimei*）や『ギョーショー』（*Gyo-Sho*）、作品集『リーブズ』（*Leaves*）などを発行した。活発な文学活動であったといえる。

以上のような日系社会内外の特徴的な動きがあったのが1930年代であった。

ワタル・モリの「バスローブの女」が発表されたのが1937年である。2回に分けて『羅府新報』に掲載されたが、その前半部分が掲載されたのは1937年3月14日であった。この物語はスラム街に住む5, 6歳の日系少年の視点を通して、彼の家の隣に住む売春婦の生活を描いている。あまり外出しない女、いつもブラインドが下りている窓、出入りする大勢の男たち。彼女のために買物の使いをするのが「僕」の親友である黒人少年だ。少年は買物から帰るとご褒美としてお金をもらう。ある日、その親友から誘われて一緒に買物に同行し、初めてその女の家の中に入り、「バスローブを着た女」の姿を見る。

早速、翌週の3月21日の『羅府新報』紙上に、この作品に対する読者の厳しい反応とそれに対して編集者が取った措置を知らせる記事が載っ

た。そのサブタイトルは“ When Readers Criticize Editor's 'Taste' ”となっている（5）。当時の英語欄担当の編集者は、1930年代に活躍した二世ジャーナリストのトーゴー・タナカ（Togo Tanaka）と、ジョージ・ナカノ（George Nakano）ルイーズ・サスキ（Louise Suski）である。

まず編集者は、本来ならば、この日に「バスローブの女」を掲載すべきところそれを取り止め、二世向けの投稿欄「二世オープン・フォーラム」（Nisei Open Forum）に寄せられた怒りと憤りの手紙に答えなければならぬという見解を示し、以下の2通を含む4通の手紙を紹介している。

It is most unfortunate for your paper for your readers when the literary standard of an otherwise fine feature page should be marred by such a contribution as 'Woman In Bathrobe.' G.S.OZAWA

* * *

...the subject matter is not of the type most conducive to good reading for young second generation readers... GOOD TASTE（5）

いずれの投書も単刀直入な表現を避けてはいるが、テーマが売春であり、そのような内容の作品をまだ若い二世たちのための文芸欄に掲載することは望ましくない、という主張である。作品の主題の倫理性を問うとともに、それを掲載した編集者の責任を問うているのである。

このように非難された編集者はこの記事の末尾で、これは異常な事態であり、今までこのような激しい怒りを読者に呼び起こした作品はほとんどなかったと述べて、一つの提案をする。すなわち、「バスローブの女」の後半部分を掲載するかどうかを決めるために、読者の意見を聞かせて欲しい、というのである。

3月28日付けの『羅府新報』に、「バスローブの女」に対する5通の投

書とともに、その作品の後半部分が載せられている（５）。投書はすべて「バスローブの女」を擁護するもの、あるいは積極的に評価をするものとなっている。なかでもジョー・オーヤマ（Joe Oyama）はこの短編を極めて高く評価する。彼は戦後、『パシフィック・シチズン』や『加州毎日新聞』『羅府新報』などに多くの評論やエッセイを寄稿したジャーナリストとしてよく知られているが、「バスローブの女」が発表されたときは25歳で、すでにその活発な執筆活動によって日系社会では注目されていた。オーヤマは『羅府新報』の文芸欄はジュニア向けのものであって、文学的水準は高くなく、したがって優れた作品と未熟な作品を別々のページに掲載すべきであると提案した後で、この短編について文体と主題の観点から次のように書いている。

...the styles good and the subject an interesting one. Personally I think “Woman in Bathrobe” was the best thing that has appeared in your feature page.... As for G. S. Ozawa, it seems that he does not understand literature needs no subject limitation.（５）

その他の投書では、“it is an excellently written article and is in no way bawdy or lacking in good taste. T.Ishikawa”（５）という年長の二世としての意見や、“After all, stories with true to life problems teach lessons and morals in an emphatic and easily understood manner. T.I.C.”という考え方が述べられている。また“‘Uprighteous indignation’ indeed! Rather call it plain, downright prudishness. K.R.S.”という主張や、“I rather enjoyed seeing that this story was different. G.M.”という感想も見られる。ここで見られる擁護論の根拠は、物語の卑猥性の否定であり、安易な道德教育の批判であり、これらの観点から評価するこの作品の持つユニークさである。今日のわれわれ

の視点から見ればごく当然の主張であるが、一世が主導権を握っていた戦前の日系社会の倫理観を考慮するならば、新たな二世の文学観として心に留めておく必要がある。

既に述べたように、同じ3月28日の紙面にこの短編の後半部分が掲載されている。「バスローブを着た女」が警官に連行され、その後、彼女の家に新しい女性が入ってくるというのがその内容である。ここで読者の注意を引くのは、掲載する理由を編集者が最初に述べていることである。この中で、この短編に対する抗議が二週間前、つまり、作品の前半部分が掲載された直後に、7件寄せられたけれども、その後、物語を全部載せて欲しいという手紙を40通も受け取ったので、後半部分は「作者の提案する幾つかの削除を受け入れた上で」(“with certain expurgations suggested by the author himself”)(5)公表した、ということが明らかにされている。結果的には、作者の自己規制に繋がったことになる。

「バスローブの女」が完結してから一週間後の4月4日付け紙上に、「バスローブの女」の掲載に対して二つの反対意見が「二世オープン・フォーラム」で取り上げられている。その一つは、“Literature must first be competent with moral decency. G.H.S.M.”(5)という立場から、売春について触れている作品は有害であるという考えであり、もう一方の意見は猥褻と芸術、好色と文学の境界線は見解の問題だと認めた上で、“I would say that English section of The Fafu Shimpo was not just the place for ‘Woman in Bathrobe’. Peter Miyake”(5)という批判である。両者とも物語の中の卑猥性をなお指摘し、そのような作品を掲載した編集者の責任を問うている。

4月11日にメアリー・オーヤマ(Mary Oyama)の投書が載っている。彼女はジョー・オーヤマの姉であり、彼女もまた1930年代から各種日系新聞への評論やエッセイ、詩などの熱心な寄稿者としてよく知られていた。彼女はこのような論争が起こる理由が理解できないという根本的な

疑問を提示する。

I still fail to see the 'why' for such a tempest in the teapot created by Watraru Mori's story. Why try to create a moral issue out of such a thing? Isn't life far more important than pious prudery, an ostrich-like closing of their eyes, or a cowardly refusal to accept conditions that actually exist? (5)

このように偽善的な上品さや現実拒否の卑怯さを批判し、最後に、この自然主義的手法の小説には不道德で卑猥な点は何もないと断言する。3月28日の紙上に掲載されたこの作品の擁護論とほぼ同じ論理であるが、その表現は一段と強く厳しくなっている。作品否定論者たちへの苛立ちが見られるといえよう。

4月18日の「二世オープン・フォーラム」における2通の投書は、「バスローブの女」に関する二世読者の反応を示す最後のものとなっている。いずれもこの作品に対する否定的な反応であるが、一方は、“there is explicitly stated moral law.”(5) といって、時空を越えた普遍的道德律として聖書の十戒を引用し、メアリー・オーヤマに反駁すものであり、もう一方は、ジョー・オーヤマを“the master nisei 'hoboe' (Webster gives no 'e' on the word like our literary genius Mr.Oyama)”と呼び、個人的誹謗に近いものとなっている。これは「バスローブの女」をめぐる文学論争が二世文学の在り方について、その本質的な議論をさらに展開するのではなく、むしろ非生産的な議論へと向かいつつあることを示している。その意味では、この日の紙面をもって論争が打ち切られたことは、読者にとっても納得がいく措置といつてよい。

2. 日系日本語文学者の反応

「バスローブの女」を巡る論争で興味深いのは、それが二世たちの中の

論争だけに留まるのではなく、一人の日系日本語文学者もこの論争に強い関心を持ち、この論争と作品そのものについて積極的に発言していることである。風見章である。実は彼は移住者ではなく、大使館付武官秘書であり、「精力的な勉強家で、地のはての何処にすてゝも、カチンと音のしそうな、二十六歳の薩摩男児」と紹介されている（『加州毎日新聞』1935年7月14日、4）。公務の傍ら、彼は『羅府新報』のライバル紙である『加州毎日新聞』の「文芸時評」を担当し、毎月1回、辛口の文芸批評をおこなっていたのである。

風見は『加州毎日新聞』の1937年4月4日号に「二世文学を語る『パスロープの女』」と題する一文を発表した（4）。およそ1600字からなる、決して長くはない評論ではあるが、明快な作品論であり、二世文学論となっている。

この中で、風見はまず二世文学の現状について触れる。「二世の平均年齢はまだ十六才だと言ふがそれだけにその文藝も若く、日系新聞の英文の文化・文芸欄に掲載される作品は「一二の例を除き概して幼稚である」としながらも、「日本語のみで文学を修業するものの夢想だにし得ない進んだものを時折見出して愕然とすることがある」と述べた上で、『羅府新報』紙上における「パスロープの女」を巡る論争に触れて、「最近こちらの二世たちの間に起った文藝上のある事件について少し書いて見たいと思ふ。これによって文学ひいては藝術に対する二世の見方考え方の一端をのぞき得るからである」としている。

次に、風見はこの作品を「所謂『審美的』立場から見て二世の間から出た最もすぐれた佳作である」と評価して、その荒筋を示す。それから前半部分が掲載された直後に『羅府新報』編集部へ送られた読者の抗議の投書について説明し、後半部分が掲載され全編を読んだあとの感想として、「この短篇は着想行文描寫ともに今までの二世文学には珍しいすぐれた作品である」と述べ、再び高い評価のことばを記している。そして

次のようなことばでこの評論を締めくくっている。

いずれにせよ創作「バスローブの女」を中心に起こったこの論争は相當二世の社會に反響を與えたらしく、どこへ行っても私は攻撃、讚美、蔑視、衝動の表情を見受けた。これも伸び行く二世が一度は通過しなければならない階段であろう。是非の批判はさておきかうした小説を書き得る人が現れたことは二世文學の將來のためによるこばしいことだと思はれる。「十六才」の二世は佳作「バスローブの女」を生んだのである。(4)

「バスローブの女」に対して、日系日本語文学の世界において一目置かれている若い文学者による極めて高い評価である。この彼の論評から、二世独自の英語文学世界に対する彼の普段の強い関心と期待、そして二世の社会そのものへの強い関心を読み取ることができる。

風見はこの「バスローブの女」論を発表してから一週間後の1937年4月11日、この作品に対する彼の評価を具体的に示すために『加州毎日新聞』にその日本語訳「バスローブ(一)」を、さらに一週間後の1937年4月18日に「バスローブの女(二)」を発表している。また、この日本語訳を掲載するに当たって、同紙の日本語文芸欄編集者はその判断を、「小説『バスローブの女』は二世文学の最高峯といつてもいい作品だと二世間に専らの評判なので翻訳を発表した」と書いている(4)。編集者が風見の見解に賛同し、そのような評価を二世から受けている英語の文学作品を、日本語文学世界で活躍している一世と帰米二世だけではなく、日本語世界で生活している一世と帰米二世の一般読者にも提示することの重要性を認識しているといえる。

3. 文学論争の意義

二世文学の成長期といえる1930年代において、「バスローブの女」を巡

る論争が持つ意義を考えると、少なくともその意義として次の二点をあげることができよう。

まずこれが極めて希な二世文学論争であり、かつ、多数の二世の関心呼び起こしたこの論争によって二世文学のテーマ上の問題でほぼ合意ができたということである。すでに触れたように、1930年代には『レイメイ』と『ギョーショー』が創作活動に強い熱意を持つ二世たちによって発行されたが、これらが同じ文学的指向を持つ二世たちのグループによる文芸同人誌であるということもあり、これらの中では文学を巡る特別な論争は見られなかった。また当時の有力な日系新聞であるロサンゼルス『羅府新報』と『加州毎日新聞』においても二世を対象としてほぼ週一回の文化・文芸特集欄が設けられ、サンフランシスコの『新世界朝日新聞』『日米』も文学作品掲載のスペースを用意していたが、そこで時々掲載される文学論がこのような文学論争にまで発展することはなかった。すなわち、文学が扱うテーマについて、とりわけその道徳性という観点から、一般読者も参加して議論がなされたことがなかったということであり、この点で今回の論争はユニークであるといえる。作品の後半部分が掲載される前に47通もの賛否の投書が編集者へ寄せられたということは、この論争の広がり大きさを示すものであるとともに、強い抗議の声に作品の後半部分の掲載を一時見合わせた編集者が、多数の作品擁護者たちの支持によって掲載を再開したことは、この論争が有力な日系紙の英語欄編集者の編集方針にも強い影響を与えたことを示している。そして最終的には、文学のテーマが道徳的制限を受けるべきではないという点で多くの読者と編集者の意見がほぼ一致したのであるが、これが当時、日系社会の中で台頭しつつあった二世たちの文学観であったのである。

しかしまた、最後まで自己の道徳観に固執し、この作品を受け入れない二世からの投書が存在していたということにも注意する必要がある。

英語世界に住む二世たちがその文学観において、さらにはその世界観においても、決して一枚岩ではなかったということはある意味では当然のことではあるが、一世の道德観・倫理観に近い考えを持つ二世たちが、新しい文学観・世界観を持つ多くの二世たちと、感情的対立も含めて厳しく対峙していたのである。

「バスローブの女」を巡る論争が持つ第二の意義は、この論争が日本語文学世界から二世の英語文学世界に対する積極的な発言を引き出し、これら二つの文学世界の接点を生み出したことである。今日の日系アメリカ文学では英語文学と日本語文学はまったく分離していて、相互の間の接点は見られないが、このような現実には二世の英語文学の誕生によって生じ、継続してきた現象である。しかし1930年代ではまだそのような接点を求める強い動きがあった。山崎一心はその編著『アメリカ文學選集』(1937)の中で、二世たちがその両親を通して日本の伝統文化に接しつつ、自分の生まれた土地であるアメリカの環境にも慣れ親しんできたことを彼らの特徴として挙げ、このような二世たちが新しい文学を生み出すことを期待するとともに、彼らの文学への理解と認識を日本語文学者たちに求めて、二世による作品を収録している(英文ページ1 - 64)。ビル・ホソカワ(Bill Hosokawa)、イワオ・カワカミ(Iwao Kawakami)など8人による8編の短編とトヨ・スエモト(Toyo Suyemoto)、ヤスオ・ササキ(Yasuo Sasaki)など4人による20編の詩である。しかし山崎は二世文学に関する具体的な論を展開してはならず、それへの期待感を述べているだけである。また、1936年に創刊された、1930年代を代表する日本語文芸同人誌『收穫』は二世の文学活動を促進し、二世文学者との交流をめざして創刊号から彼らの作品を掲載した。しかしながら、ここでもそれらの作品に対する論評や二世文学論の展開は見られなかった。

風見章の場合、「バスローブの女」についてその文学的価値を具体的に論じ、それを高く評価し、かつ旧来の一世的文学観を厳しく退け、新し

い二世文学に大きな期待を寄せている点が大きな特徴である。しかもそのような彼の文学観を一世と帰米二世が情報源としている日系新聞の日本語欄に書き、彼らに二世社会で起こっている価値観・倫理観を巡る「事件」に目を向けさせたのである。風見がアメリカでの居住者ではなく外交官であったことをどのように考えるかが一つの問題点となりうるが、むしろこのような文学観、二世観を持つ若い外交官が当時のカリフォルニアに勤務していたということは興味深いことである。

以上のように「パスロープの女」を巡る論争の意義を確認した後で、今日の我々の視点から見て、この論争の中で議論に上らなかった重要な点を指摘したいと思う。この作品の中で提起されていると読者が十分受け止めることができる政治的社会的課題としての人種と貧困の問題、とりわけ人種問題である。

この短編は確かに優れた作品である。当時の二世たちの多くの文学作品が青春に関わるテーマを取り上げているなかで、厳しい社会的現実を扱っている点でも珍しい作品といえる。語り手として無垢な少年の起用に見られる巧みな手法、彼の素朴な好奇心と発言を通して描かれる売春婦の「女」とその生活。これらを通して、より大きな問題としてのスラム街という現実世界の姿が浮かび上がってきて、説得力をもって読者の心を捉えるが、同時にまた、主人公の日系少年と黒人少年との間の子供らしい友情と、風見章が「白人私娼」と書いている「女」と2人の少年たちの人間的な触れ合いも、物語展開上の重要な要素となって読者に強い印象を与えていることも見逃すことはできない。しかし、この作品を巡る論争の中で、このような異人種間交流あるいは異人種間関係に言及した意見が見られなかったのは、今日のわれわれにとってある種の物足りなさを感じる点である。実は、「白人私娼」の「女」が、風見がいったように、果たして本当に「白人」であったのかという疑問もある。主人公の少年がその「女」を“*She was neither white nor black.*”(『羅府新

報』1937年3月14日、5)といているからである。もし「女」が「白人」でないならば、3人間の関係は人種的マイノリティ同志の親しい交流となるので、このような観点からの作品の議論があってもよかつたのではないと思う。少なくとも「(メアリー・)オーヤマは戦前から異人種間のデートや結婚、人種間の相互理解に関心を持っていた」(増田 54)のであるから⁴⁾。1930年代の日系社会の中には、若い二世たちが異人種間交流について積極的な見解を公にすることを控えさせるものが、あるいは、そのような見解を日系新聞に掲載することを控えさせるものが、あったのかもしれない。

おわりに

歴史の中に埋もれてしまっている1930年代の二世文学論争を掘り起こし、その経過を辿り、その意義について検討してきた。そしてこの論争の引き金となり、これまた歴史の中に埋もれていた優れた短篇作品を掘り起こし、それについての評価もごく簡潔ではあるがおこなってきた。これらの試みによって当時、成長期にあった二世文学の動きの一端が明らかになったが、この動きが若い二世たちの持つ新しい文学観そのものであり、その文学観の背後にある彼らの倫理観・世界観の反映であることはいうまでもない。1930年代はいろいろな次元で一世と二世の世代間乖離が進んでいったが、その一方の当事者である二世たちの文学観・世界観は具体的にはこのようなものであったのである。

「パスロップの女」を巡る論争後、主要な日系新聞で二世たちの新たな文学論争は見られなかった。この論争の結論が二世たちの間で広く受け入れられていったことの証かもしれないが、日中戦争の開始に伴う日米関係の悪化により二世たちの関心の対象が変化し、その新たな対象を作品化することにより大きなエネルギーを費やしたからだともいえよう。日本語文学の世界から二世の英語文学世界への積極的な発言もまたその

後、なされていない。この点、二世の作品を最後に載せた『收穫』第4号が発行されたのが1937年であったことは、偶然とはいえ、象徴的である。

「バスローブの女」の作者であるワタル・モリのその後の執筆活動に強い関心を持つが、これについては全く不明である。今日われわれが持っている彼に関する唯一の情報は、「バスローブの女」を発表したとき、彼は「16歳」であったという風間章の記述だけである（『加州毎日新聞』1937年4月4日、4）。1930年代の二世文学で探るべきことが多いことは、ここでも明らかになるのである。

注

- 1) 「バスローブの女」の作者を風見章は「ワタル・ホリ」としているが（『加州毎日新聞』1937年4月4日、4）これは誤りである。原文ではWataru Moriとなっている。
- 2) 日系アメリカ文学作品の発掘という視点から、原文を本稿の最後に「資料」として収録した。
- 3) 1930年代の日系社会と日系文学に関しては、山本岩夫「幻の文芸誌『收穫』」も参照のこと。
- 4) スタン・ヨギも、戦前から他民族との交流推進に積極的であったメアリー・オーヤマについて、次のように述べている。“Other nisei writers were interested in politics, particularly in cross-cultural relations within the United States, and in building bridges between nisei and other American ethnic groups. A leading figure among this group of nisei was Mary Oyama, who wrote in various forms for the Japanese American press all along the West Coast.” (129)

引用・参考文献

Gyo-Sho: A Magazine of Nisei Literature. c.1935. Mt. Vernon, Iowa: Cornell College, c. 1938.

Katayama, Taro. “Haru.” *Reimei* 1.3 (Spring 1933) : 7-18.

Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple UP, 1982.

Leaves. Los Angeles: c. 1932.

Mori, Toshio. *Yokohama, California*. Caldwell, Idaho: Caxton Printers, 1949.

. *The Chauvinist and Other Stories*. Los Angeles: UCLA Asian American Studies Center, 1979.

Mori, Wataru. "Woman in Bathrobe." *Rafu Shimpo* 14 March 1937: 5; 28 March 1937: 5.

Pacific Citizen. San Francisco: JAACL, 1979-.

Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Ed. King-Kok Cheung. Cambridge: Cambridge UP, 1997. 125-55.

Wong, Sau-ling Cynthia, and Steven H. Sumida, eds. *A Resource Guide to Asian American Literature*. New York: MLAA, 2001.

植木照代、ゲイル・K・佐藤他『日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む』創元社、1997年。

風見章「二世文学を語る 『パスロープの女』」『加州毎日新聞』1937年4月4日、4ページ。

。(訳)「バルロープの女(一)」『加州毎日新聞』1937年4月11日、4ページ。

。(訳)「バルロープの女(二)」『加州毎日新聞』1937年4月18日、4ページ。『加州毎日新聞』ロサンゼルス、1931 - 92年。

『日米新聞』サンフランシスコ、1899 - 1942年。

増田直子「帰還後の日系社会 コラムニスト、メアリー・オーヤマの目を通して」『史境』第43号(2002)54 - 71ページ。

『羅府新報』ロサンゼルス、1903年 - 。

阪田安雄「戦後50年と日系アメリカ人史研究 語られない1930年代」『移民研究年報』創刊号(1995)3 - 42ページ。

『新世界朝日新聞』サンフランシスコ、1935 - 41年。

山崎一心編『アメリカ文學集』警眼社、1937年。

山本岩夫「幻の文芸誌『收穫』」篠田左多江・山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究 日本語雑誌を中心に』不二出版、1998年、17 - 29ページ。

資料

“Woman in Bathrobe” by Wataru Mori

I rarely saw her leave her house. On these occasions that I did see her outside, she would merely walk to the grocery at the corner of the alley and return with a bag of groceries or vegetables. Sometimes she would look up and down the alley and disappear into the house again.

Her hair was dark and long and wavy. It curled upward at the ends. Completely covering her neck. She was neither white nor black. Nor was she brown. Her color was of a creamish tinge that verged on light and dark. Her brows were thin curving black lines. But her eyes, shadowed by long black lashes, were dark and deep and brooding. Her face seemed soft and smooth. Once she smiled to me, and her dark red lips parted to reveal a glint of white teeth, and two tiny dimples formed in her cheeks.

Her house was next door to ours. She had been there before we moved in. It was a small yellow house, not longer than ours, though it seemed longer. A short flight of five or six steps climbed to the little porch facing the alley.

She had many visitors, and they were all men. They were Negroes and whites. They came in the morning, in the afternoon, and at night. The house was quiet in the daytime, but at night a phonograph played loud jazz music and there was much laughter. I would creep near the windows to see what was happening, but I never did see anything because the blinds were always drawn.

I would never have seen the inside of that house had it not been for Caesar. Caesar was a big Negro boy. He wasn't exactly black nor with features like a Negro's. His color was a sort of blackish brown. But everybody said he was a “nigger” so I took their word for it. Caesar was always being teased by the boys because he told so many lies. One time a boy got sore at him and said that he'd get his .22 and shoot him. Caesar said, “You just try it. I'll get my .23 and shoot you.” I thought a .23 was something small like a BB gun, so I laughed with the boys.

Caesar used to come to the alley and run errands for the woman next door.

One day when I met him outside I asked him if that woman was his sister.

“Naw,” he said, “she ain’t my sister. But she sure got a lot of money. She tells me she’s gonna buy me a gun next Chris’mus.”

“No foolin’?”

“Who says I’m foolin’?”

“Nobody. Gee, but how much she got?”

“How much she got?” Caesar made his big eyes bigger. “Lawd, she don’t know herself. She got so much money she can’t count them. Eve’y time she try to count them she get some more money, so she got to start all over again.”

“Gee, I wish I had that much money.”

“Anybody would,” exclaimed Caesar. “Hey, look.” He pulled out a two-bit piece from his pants pocket.

“Where you get that money?”

“She give it to me today ‘cause I run a n’errand for her.”

“Gee.” I stared at the coin. It was more money than I ever had for my own.

“Everytime I run a n’errand for her she give me some money. One time she give me fifty cents just for bringing her a paper. She sure am rich, ain’t she?”

I stared at the two-bit in wonder and say, “I’ll say.”

“Next time I run a n’errand for her I’ll call you so she can give you some money too.”

I cried, “Gee, Caesar, will you do that? Gee.”

I forgot then that all the boys made fun of Caesar. He was my friend now.

One afternoon Caesar called me from outside.

“C’mon, we gonna run a n’errand for her.”

We went to the grocery store and bought a pound of sausage, a loaf of bread, and two heads of cabbage. I carried the cabbages.

“Maybe she won’t give us two two-bits,” Caesar said, “‘cause there’s two of us, but she gonna give us a lot. Don’t you worry, boy.”

We climbed the short front steps. Caesar opened the screen door.

“All right, c’mon in.”

I hesitated. I was afraid my mother would be watching from our window. I felt that she didn’t like this woman.

“C’mon, we gotta take this into the kitchen.”

I entered. We passed through the parlor. It was gloomy because the blinds were drawn. I saw a couch in one corner, a small table and two or three chairs. The heavy smell of perfume and toilet powder made my stomach feel queer. We walked by a closed door, then into the kitchen. The wavy-haired woman was brewing coffee. She wore her bathrobe.

“All right, Caesar, just put them on the table.” (*The Rafu Shimpo*, March 14, 1937)

She smiled as she took the cabbages out of my arms and laid them on the table. The heads were quite large and heavy.

“I see you brought your little friend today, Caesar.” She addressed me, “You’re my little neighbor, aren’t you?”

I told her, a little more audibly.

She laughed softly and bent toward me.

“You’re not afraid of me, are you, Honey?”

“That’s a good boy.”

She reached into a pocket and jingled some coins.

“I must reward you boys because you’ve been so nice.” She held out a couple of quarters. “Here you are,” she said, giving me one, then Caesar one. “Buy yourself some ice cream and have a good time.”

“Thank you very much.” I clenched the coin in my fist.

“Thank you, Miss Julie,” Caesar said.

“Goodbye.”

“Goodbye.”

Caesar bought an ice cream cone and a bag of cinnamon drops. I bought ice cream too, and a bag of peanuts.

“Is she sick?” I asked Caesar.

“Miss Julie? No, she ain’t sick. Why you ask that?”

“She always wears a bathrobe. Why don’t she wear a dress?”

“She don’t have to wear a dress ’cause she never go outside.”

“Why don’t she go outside?”

“Cause she don't feel like. That's why.”

“Oh.” I still didn't understand why she seldom left the house, but I did not question Caesar anymore.

I did not see Miss Julie again until a week later. I had come home from school and was sitting on the porch eating a slice of buttered bread. A police patrol wagon turned into the alley and stopped before the yellow house. Then Miss Julie emerged upon the porch. She no longer wore a robe, but a light blue dress that smoothly revealed the contours of her rounded form. A policeman came out and closed the door behind him. He escorted her into the patrol, then the policeman standing said, “All right, Ed.”

The bus roared out of the alley.

I ran into the front room where my mother was sewing a dress.

“The policemen came and took the lady away,” I told her excitedly.

“The next-door woman?”

“Yes, they put her in the hurry-up wagon.”

She stepped on the treadle and continued sewing. I waited for her to say something, but she remained silent.

“Why did they take her away?” I asked.

“Because she is a bad woman.”

“Did she steal something?” I thought the only bad thing a woman could do was stealing something.

“Yes, she stole money from people.”

“Why do so many men go to her house, mama?”

She stopped sewing and turned a hem.

If Miss Julie stole from her friends, I wondered why they should go to her house. So I repeated the question.

“They go to have their clothes sewn,” she replied, and resumed her sewing.

“Oh, and then did she rob them?”

“Yes. She took the money out of their pockets. She is a bad woman, I am glad to see her put in jail.”

So that was why she had so much money, I thought. I could not actually believe that Miss Julie was a thief because she was so nice and gave me a quar-

ter, but I did not enter her house again.

Two days later I saw people going in and out of her house like before. I wondered who lived in the house after Miss Julie was taken away, until I saw her on the porch one morning. She was in her bathrobe.

Caesar called me when he had an errand to do for Miss Julie, but I refused to go.

“What’s the matter with you?” he demanded. “Don’t you want no quarters?”

“Sure, but-but I can’t go.”

“Why can’t you? Why can’t you go?”

“Because I my mother said I can’t go.”

Caesar stared at me queerly and swore as if he were surprised. I did not want to tell him that Miss Julie was a thief.

Caesar did not come to the alley anymore. I thought Miss Julie had decided to do her own errands. I did not see her anymore, either. I wondered if she were sick. Maybe she couldn’t even walk. Many days later, I noticed that I hadn’t seen anybody climbing up the steps of her house since several days back.

Maybe she was dead. Maybe she was in a hospital. I thought of different tragic possibilities that might have overtaken her, but soon I forgot about Miss Julie.

For two months the yellow house was silent. Then one day I saw two or three men enter it.

“Miss Julie is back,” I said to myself.

But I was wrong.

I saw the woman as she walked up the steps one morning with a bottle of milk in her hand. She was larger than Miss Julie. Her complexion was something like Caesar’s, and her eyes were not round like Miss Julie’s, but small and sharp at the corners. Her cheeks and lips were daubed with rouge. I never saw her smile. (*The Rafu Shimpō*, March 28, 1937)